

69年間を振り返る そして70周年を迎えるにあたっての想い

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男

今年、創立69周年を迎えた健育会グループ。70周年を見据えて、これまでの健育会の歩みを振り返り、理事長としての想いをお話します。

健育会グループが歩みを始めたのは、1953年。初代理事長である父、竹川不二男が東京都板橋区に開業した竹川病院からスタートしました。当時は戦後10年にも満たない頃で、医療保険制度も整備されていない状況にもかかわらず、毎日多くの患者さんが診療所を訪れました。

なかには治療費を払えずに自分で育てた野菜を持ってくる患者さんもいましたが、父は「目の前の患者さんを救う」という強い信念で診療所を続けました。そうした父の姿を小さい頃から目の当たりにして育った私の中には、いまでも父の信念が強く根付いています。



一方で、私が医師になる頃には医療が大きな転換期を迎えます。父の時代は聴診器1本で患者さんと向き合い、医師の勘と経験をもとに病気の診断や治療を行っていました。しかし私の時代には、Evidence-Based Medicine（科学根拠に基づいた医療）に移行し、レントゲンと心電図しかなかった医療機器にはCTやエコーが登場。全身を簡単に輪切りで見られるまでになりました。

そうした中で、私自身は大学病院に勤務しながら教授陣から論理的思考を学びます。思い込みを捨て、科学的根拠に基づいてあらゆる可能性を探りながら患者さんを診断することの重要性を叩き込まれました。こうした考え方は、現在の私の経営の考え方のベースにもなっています。



80年代当時の竹川病院



80年代当時の熱川温泉病院

また大学病院時代は、長期休暇中に父の経営する竹川病院と熱川温泉病院の手伝いをしていました。そこで2つの病院の医療と経営を自分一人で行わなければ気が済まない父の姿を見て、「医療経営とは何か？」を自問自答するようになります。

80年代に健育会グループで働き始めると、私は経営について学ぶため、東京青年医会の早朝勉強会に参加。さらに最も尊敬する富士ゼロックス元代表取締役会長、小林陽太郎さんのアドバイスで経済同友会に医師として初めて入会します。

そこで衝撃を受けたのは、日本の暗い将来像と財政状況でした。日本には、医療は人の命を救う “聖職”だから赤字もやむを得ないという考えが浸透していましたが、その負債を賄う国の財政も近いうちに逼迫するというのです。このままでは医療崩壊が起これ、日本の医療は必ず立ち行かなくなると強い危機感を抱きました。

こうして私は民間病院の経営者として「光り輝く民間病院グループ」を目指すべきであると確信するようになります。堅実な経営に軸を置き、質の高い医療を提供して日本の医療を支える民間病院のパイオニアになる。そのために医療と経営を完璧に分けるツートップ制を採用し、病院経営の最適化を目指すこととなります。



では実際に「光り輝く民間病院グループ」を実現するためには、どうすればいいのか？ 私はこの問いに対し、患者さんや職員、ご家族など医療に関わる全ての人の心を豊かにする必要があると考えました。

そして患者さん一人一人の心を豊かにするには、ご家族を含めたチーム体制でニーズに合った質の高い医療を提供することが大切です。職員にもやりがいを持って働いてもらうため、教育と研修にも力を入れてきました。

また私はある時から、医療人は人の尊厳を平等に扱わなくてはならないと思うようになります。これは慶應義塾塾長であった小泉信三先生が話す肉声テープを聞いた時のこと。福澤先生の言った「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉を解説する際、尊厳という言葉が使われていて大変印象に残りました。

「尊厳」であれば平等に扱うことができると気づき、目の覚めるような思いがしたのです。昨年には「愛情を持って親身な対応」というスローガンを追加し、今まで以上に患者さんの尊厳を尊重する医療を目指しています。



石川島記念病院

そして現在、世界では感染症COVID-19が流行し、すでに3年が経過しました。その間に健育会グループの各病院施設でもミニクラスターが散発しましたが、大事に至ることもなく、ワンチームで乗り越えてきました。

今年は万全な安全対策のもと、新人研修や医師研修などの対面実施が叶い、来年迎える70周年から先を見据えたSDGsフォーラムも実現。世界でも類を見ない少子高齢化社会を前に、健育会グループの持続可能な将来像をみんなで模索するためのスタートを切ることもできました。

第8波が到来している今、コロナ病床に転換した石川島記念病院でも再び新規の患者さんを受け入れています。これまで培ってきたチーム医療をベースに引き続き病院施設が一丸となり、新しい年を邁進していきたいと思えます。